

平成 28 年度版



平和ってなに？



～戦争を知って平和を考えよう～

7月12日は「宇都宮市平和の日」

7月12日～8月15日は「宇都宮市平和月間」です

昭和20年7月12日深夜、第2次世界大戦の中、宇都宮に空襲がありました。宇都宮市では、平和を願い、この日を「宇都宮市平和の日」とし、7月12日から終戦日である8月15日までを「宇都宮市平和月間」と決めました。この期間中、宇都宮市内の図書館では、平和関連の本などを集めたコーナーを開設しています。あわせて、平和を考えるための図書のリストを作成しました。どうぞご利用ください。

■大人向けの本

<p>【凡例】 『本のタイトル』 著者 出版社 出版年 本を所蔵している図書館 中＝中央図書館 東＝東図書館 南＝南図書館 上＝上河内図書館 河＝河内図書館 () 内は本の分類番号 概要</p>	<p>『戦争が終わった日 栃木県民が語る八月十五日』 編集工房随想舎／編 随想舎 1989 中・東・南・河 (K200.7) 本書は、昭和20年8月15日の栃木県民の体験談である。空襲・食糧難・学童疎開・勤労働員そして、肉親・友人の出征・戦死など。戦争が遠く離れた時代や地域のものではないことと、平和の大切さを知る。</p>
<p>『うつのみやの空襲』 宇都宮市教育委員会／編 宇都宮市教育委員会 2001, 2011 全館 (K210.7) (213.2) 宇都宮市の「戦災記録保存事業」の報告書。近代の宇都宮の歴史から、戦後の平和への道のりまでを、多数の写真や資料、市民への聞き取り調査などでわかりやすく記録している。</p>	<p>『宇都宮空襲の記憶』 宇都宮市平和委員会／編 宇都宮市平和委員会 2005 中・東・南 (K390) (K950) 昭和20年7月12日に起きた宇都宮大空襲当日の記憶を中心に、市民が自身の戦争体験をつづった記録集。当時の宇都宮市で起きた、九つの貴重な体験が収録されている。</p>
<p>『二荒山は炎の中に』 宇都宮平和祈念館建設準備会／編 随想舎 1992 中・東・南・河 (K390) (090) 宇都宮空襲・戦災の実態を、多くの図版や写真、絵を使い、分かりやすく解説。市民による宇都宮空襲の切実な体験談を交え、身近なところから平和を考える1冊。</p>	<p>『実録！宇都宮大空襲』 徳田浩淳／著 宇都宮平和祈念館をつくる会 1999 中・南 (K390) 当時市役所に勤務していた郷土史家の徳田浩淳氏が、宇都宮大空襲のあった7月12日から19日までの一週間を、自身と家族の体験を中心に克明に記録したもの。</p>



『疎開した四〇万冊の図書』

金高謙二／著 幻戯書房 2013

全館 (016. 2)

第二次世界大戦中、図書館の蔵書を戦禍から守るため、旧都立日比谷図書館の蔵書約40万冊が1年がかりで疎開した。図書館員や近隣の高校生たちの手で、どのように本は疎開したのか。また、帝国図書館を含む全国の図書館の蔵書が疎開した様子や、戦後の図書館についても記された、史実に基づいたドキュメンタリー。

『戦争中の暮らしの記録』

暮らしの手帖編集部／編 暮らしの手帖社 1972, 2010
中・東・南・河 (210. 7) (384)

戦争中に人々は何を食べ、何を着、どのように働き、また移動したか。物資の窮乏や男子の動員、迫り来る戦禍の中、どのように生活を続けていったか。普通の人たちの生の声と写真によって、戦争中の暮らしが身近なことから蘇る。

『ぼくが遺骨を掘る人「ガマフヤー」になっ
たわけ。』 具志堅隆松／著 合同出版 2012

全館 (210. 7)

遺骨は雄弁に戦争を語る。30年間、沖縄の遺骨と戦争遺物を収集・記録してきた著者の経験から学んだ「戦争の現実」と、それを次の世代に引き継ぐための活動をまとめた記録。

『たじろがず沖縄に殉じた荒井退造』

「菜の花街道」荒井退造顕彰事業実行委員会／著

下野新聞社 2015

全館 (289. 1) (K289)

宇都宮市出身でありながら沖縄戦時に警察部長を務めた荒井退造。戦後70年を節目に、その功績が大きくクローズアップされている。講演録など様々な資料を交え、荒井退造の姿が描かれる。

『硝煙の向こうの世界』

渡部陽一／著 講談社 2012

全館 (319)

戦場カメラマン・渡部陽一が実際に世界の4つの紛争地域取材して見た“戦場の現実”。紛争国のデータと紛争の概要も記載し、「今何が戦場で起こっているのか」をわかりやすく解説した本。

『ノーモアヒロシマ・ナガサキ』(英文併記)

黒古一夫／編 清水博義／編 James Dorsey／訳
日本図書センター 2005

全館 (319. 8)

被爆した広島・長崎の人々の様子や、街並の写真、被爆者の手による絵画作品など、原爆被害の悲惨さを伝える資料が収められている。本文は英文併記。

『平和のための名言集』

早乙女勝元／編 大和書房 2012

全館 (319. 8)

平和の糧となるような名言・名句が選ばれ、1日1言として、366のメッセージが収められている。古今東西、小学一年生からブータン国王の言葉まで登場する。戦争と平和を考えるためのきっかけになる一冊である。

『ぼくは戦争は大きい』

やなせたかし／著 小学館クリエイティブ 2013
全館 (319. 8)

やなせたかし氏が自らの従軍体験をつづった本。戦争のことを語ってこなかった氏が、未来を生きる世代に残したいと、亡くなる直前まで語った最後のメッセージ。

『戦火の子どもたちに学んだこと』

西谷文和／著 かもがわ出版 2012

全館 (369. 3)

公務員からジャーナリストに転身した著者の、10年に亘る紛争地取材ノート。人々に苦難を強いる戦争の過酷な現実と、その中でも夢を捨てずに生きようとする子どもたちの姿が書かれている。今私たちに何ができるのか、考えさせられる本。

『ヒトはなぜ戦争をするのか？』

アルバート・アインシュタイン／著 ジグムント・フロイト／著 浅見昇吾／編訳 花風社 2000
中・東・河 (391)

「人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか？」その答えとして、文化の発展が生み出した心のあり方と将来の戦争がもたらすとてつもない惨禍への不安こそが戦争への抑止力となることを明らかにしている。





<p>『黒い雨』 井伏鱒二／著 新潮社 2003 全館 (F) 原爆の激しさ、恐ろしさを声高に表現する作品が多い中、この作品は被爆者の日常をただ淡々と描いている。市井の人の上に冷たく降り注ぐ黒い雨。静かな光景が原爆の残酷さを際立たせ、平和の大切さを強く訴える。</p>	<p>『生きていてほしいんです』 田中和雄／編 童話屋 2009 全館 (911.5) 田中和雄と谷川俊太郎が共同編集した反戦詩集。原民喜・峠三吉などの詩に、谷川俊太郎の詩を織り交ぜた全41編の詩には、強い衝撃を受ける。その行間にある深い思いに、戦争とは何か、平和とは何かを改めて考えさせられる。</p>
<p>『きけわだつみのこえ』 日本戦没学生記念会／編 岩波書店 1995 中・東・南・河 (915.6) 第二次世界大戦末期に戦没した日本の学徒兵の遺書を集めた遺稿集。学生たちは、死を前にしてなお学問への情熱を絶やさず、真理と真実を探究しようとした。平和と自由への痛切な希望を後世に託している。</p>	<p>『月光の夏』 毛利恒之／著 講談社 1995 全館 (F) 出撃前の最後の思い出にベートーヴェンのピアノソナタ「月光」を弾いた特攻隊員がいた。鳥栖市に残る一台のピアノが持つ逸話をもとに作られたドキュメンタリー・ノベル。戦争の非情さを伝えると共に、語り継ぐことの大切さを教えてくれる。</p>
<p>『綾瀬はるか「戦争」を聞く』 TBSテレビ『NEWS 23クロス』取材班／編 岩波書店 2013 全館 (916) 広島市出身の若い女優が、祖母の戦争体験を聞いたことを発端に、広島・長崎・沖縄・ハワイなどを巡り、戦争の証言を聞いていく。悲惨さを直視し実話を後世に残すための貴重な記録。</p>	<p>『原爆の子 (上)・(下)』 長田新／編 岩波書店 2010 全館 (916) 自らも広島で被爆した編者が、平和教育のために編集した原爆体験手記。原爆によって被害を受けた少年少女1175名の手記から選ばれた105篇を収録。広島の少年少女たちの心に消えない傷痕をのこした原爆の恐ろしさを教えてくれる、希有の記録である。</p>
<p>『13歳のホロコースト 少女が見たアウシュビッツ』 エヴァ・スローニム／著 那波かおり／訳 亜紀書房 2015 全館 (936) アウシュビッツを生き延びて、現在オーストラリアに住む著者が次世代に語り伝える回想録。少女時代を家族と共に幸せに暮らしていた著者は、ナチスの台頭と共に過酷な状況に追い込まれていく…。</p>	<p>『長崎の鐘』 永井隆／著 日本ブックエース 2010 全館 (916) 1946年脱稿、1949年初版発行。放射線医療の現場にいた著者が、科学者として、また、一市民の立場から、自ら体験した長崎の原爆投下を克明に描いた作品。</p>
<p>『総員玉砕せよ』 水木しげる／著 講談社 1995 全館 (C) 戦争を一兵士の側から書いた記録は数多くとも、当時を体験した漫画家だからこそ描けることがある。敗色が濃厚な激戦地で、部隊は玉砕を命じられる。立派な人も愚かな人も登場し、戦場のリアルさ・無意味さを訴えかける。</p>	<p>『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル／著 池田香代子／訳 みすず書房 2002 全館 (946) 第二次世界大戦中、心理学者・精神学者だった著者は、ナチスにより強制収容所に収容された。強制労働、懲罰、「選抜」。過酷な現実により、多くの被収容者が感情を失い死に向かう極限の中で生と死をわけたものは何だったのか。</p>



■子ども向けの本



『忘れないでください 宇都宮空襲の記憶』

小林新子／文 相原千草／絵 随想舎 2008

全館 (K950) (090)

著者が中学1年生のときに体験した宇都宮空襲と、戦後の暮らしについて書いた本。私たちの住む宇都宮で、戦争はどんな爪あとを残したのか。もう二度と戦争を起こさないために、今ある平和な暮らしを見つめるために、小林さんの記憶にふれてみよう。

『宇都宮大空襲 一少女の記録』

小坂橋武／絵・文 随想舎 2007

全館 (K950) (E03 コ)

昭和20年7月12日。恐れていた空襲がきた。夜中、アメリカ軍の飛行機がたくさん飛んできて、宇都宮に爆弾を落としていった。街は焼かれ、500人以上の人が犠牲になった。当時、中学1年生だった少女が体験した宇都宮大空襲の記録。

『空にさく戦争の花火』

高橋秀雄／作 森田拳次／絵 今人舎 2015

全館 (E01 タ)

亡くなったひいおじいちゃんの春造さんは、花火が嫌いだった。ある日、春造さんの戦友が訪ねてきた。戦時中は、花火の音も煙も爆発して光ったら艦砲射撃されているのと同じという話を聞く。作者は宇都宮在住。

『さがしています』

アーサー・ビナード／作 岡倉禎志／写真

童心社 2012

中・東・南・河 (E01 ビ)

H27年度教科書 - 6年

「おはよう」「いただきます」「ってきます」普通の日常が、あの日、一瞬でなくなってしまった。残されたものたちがあの日常の続きを今も探している。残されたものたちが日常から引き裂かれる痛みや悔しさ、寂しさを、静かな言葉で語る写真絵本。



『バスラの図書館員 イラクで本当にあった話』

ジャネット・ウィンター／絵と文 長田弘／訳

晶文社 2006

全館 (E02 ウ)

H27年度教科書 - 6年

バスラはイラク南部の文化都市。1990年4月、イラク戦争の空爆から図書館の本を守るため、街の人々と協力して3万冊もの蔵書を運び避難させた女性図書館員を描いた絵本。

『ちいちゃんのかげおくり』

あまんきみこ／作 上野紀子／絵

あかね書房 1982

全館 (E03 ア)

H27年度教科書 - 3年

「かげおくり」はちいちゃんのおとうさんが教えてくれた遊び。ちいちゃんは一人でかげおくりをしながら、家族が来るのを待っている。戦争はちいちゃんから家族を奪ってしまった。幼い少女の目から見た戦争の物語。

『一つの花』

今西祐行／文 鈴木義治／絵 ポプラ社 1975

全館 (E03 イ)

H27年度教科書 - 4年

食物が不足していた戦争中、いつもおなかをすかせていた幼いゆみこの口ぐせは「一つだけちょうだい」だった。ある日、ゆみこのお父さんも戦争に行くことになった。出発するお父さんが、最後にゆみこにくれたのは、一りんのコスモスの花だった。

『せかいいち うつくしいぼくの村』

小林豊／作・絵 ポプラ社 1995

全館 (E03 コ)

H27年度教科書 - 4年

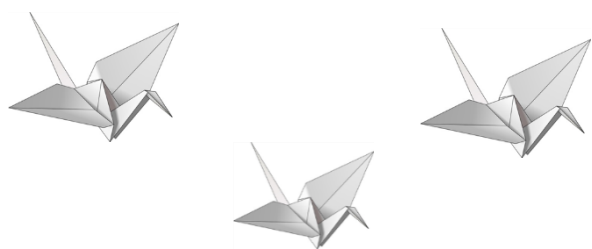
アフガニスタンの村、パグマン。平和だった国で内戦が始まってからも、パグマンでは春には草花が咲き乱れ、夏には果物が実り、人々はこの村で平和に暮らしていた。戦争の中でも力強く生きる人々とうつくしい村を描いた絵本。



<p>『かわいそうなぞう』 つちやゆきお／ぶん たけべもといちろう／え 金の星社 1970 全館 (E03 ツ) 戦争が激しくなってきた東京。動物園では動物達が空襲によって逃げ出して暴れないよう、殺さなくてはならなかった。3頭のぞうにもついにその時がきてしまった。健気に生きようとするぞう達と、決断をせまられた飼育員達の苦しみが伝わってくる。</p>	<p>『ひろしまのピカ』 丸木俊／文・絵 小峰書店 1980 全館 (E03 マ) 広島に原爆が投下されたのは、1945年8月6日午前8時15分のことだった。みいちゃんは、お父さん、お母さんと一緒に朝ごはんを食べていた。その時、それは突然やってきた。すさまじい光がつきぬけたかと思うと、何もかもが地獄絵のように変わってしまった。</p>
<p>『絵で読む広島原爆』 那須正幹／文 西村繁男／絵 福音館書店 1995 全館 (210) 広島に落とされた原爆を、時間を追って、上空から見た絵で克明に再現した絵本。大きな町を一瞬でなぎたおした爆発のすさまじさがわかる。絵は、服装や建物を当時の住民に聞き、忠実に描かれている。原爆がどのように作られ、どうして広島に落とされたのかについても、図や年表で詳しく説明されている。</p>	<p>『マララ 教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』 マララ・ユスフザイ／著 パトリシア・マコーミック／著 道傳愛子／訳 岩崎書店 2014 全館 (289.2) H28年度教科書 - 中学2年 女の子にも学校に通う権利がある。幸せに生きる権利がある。と訴え、パキスタンでイスラム武装勢力タリバンに襲撃されて重傷を負いながらも一命をとりとめ、暴力に屈することのないマララ・ユスフザイさんの初めての手記。</p>
<p>『ガザ 戦争しか知らない子どもたち』 清田明宏／著 ポプラ社 2015 全館 (310) 国連職員の著者がイスラエルと戦争中の2014年、ガザ地区を訪問した時のレポート。ずっと戦争にさらされている子どもたちと、その地域で人のために働く大人たちの姿が、写真と簡潔な文章で描かれる。「普通の子ども」として成長できる平和を望む本。</p>	<p>『戦争を取材する 子どもたちは何を体験したのか』 山本美香／著 講談社 2011 全館 (310) 地雷で脚を失った少年、兵として戦わされた少年…。戦争の事実を伝えることが平和につながると信じ、紛争地帯を取材し続けた著者による、ありのままの戦争が書かれた本。なぜ戦争が起こるのか、平和のためにどうすればいいのか、考えさせられる1冊。</p>
<p>『アンネのバラ 40年間つないできた平和のバトン』 國森康弘／文・写真 講談社 2015 全館 (627) 東京都杉並区にある高井戸中学校で咲くバラ「アンネ・フランクの形見」。アンネのバラを育てることは平和への願いを受け継ぐこと。この花を枯らすことなく40年間、バラを育ててきた人々の思いや平和への思いを美しいバラの写真とともに感じられる写真絵本。</p>	<p>『光のうつつえ』 朽木祥／作 講談社 2013 全館 (913) 原爆投下から四半世紀後の広島が舞台。被爆2世である中学1年生の主人公達が、あの日、身近な人たちに何が起こり、どんな思いを背負って生きてきたのかを知る。戦争を知らない世代が戦争による様々な痛みを受け止め、真摯に向き合う物語。</p>
<p>『ガラスのうさぎ』 高木敏子／作 武部本一郎／画 金の星社 2005 中・東・南・河 (913) H28年度教科書 - 中学1年 12歳の敏子は、東京大空襲で母と妹2人を亡くしてしまった。さらに目の前で、父を機銃掃射によって亡くし、たった1人で父を火葬する敏子…。どこまでも続く暗闇のような戦中戦後の中を、けなげに生きていく少女の体験記。</p>	<p>『ひめゆりの少女たち』 那須田稔／著 偕成社 1977 中・東・南 (913) 太平洋戦争中、沖縄戦で散っていった女生徒隊「ひめゆり部隊」の少女達の話。この戦争で、十代の少年少女が銃をとり、最前線の看護婦として兵士とともに戦った実話が書かれている。</p>



<p>『被爆者 60年目のことば』</p> <p>『被爆者 続 70年目の出会い』</p> <p>会田法行／写真・文 ポプラ社 2005, 2015 全館 (916) (369) H27年度教科書 - 5年</p> <p>ヒロシマ・ナガサキで被爆してから60年目。被爆体験は歴史上の出来事ではなく、今なお深い悲しみが続いている。戦争・平和・生きることの意味を、6人の被爆者の言葉と写真で綴った写真絵本。</p>	 
<p>『対馬丸』</p> <p>大城立裕／作 嘉陽安男／作 船越義彰／作 理論社 2005 中・東・南 (916)</p> <p>昭和19年(1944年)8月22日。沖縄から本土に向かった学童疎開船「対馬丸」は、アメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、深夜の海に沈んだ。乗船者1661名、うち学童800余名。生き残った学童はわずか59名。疎開史上、最大の悲劇である対馬丸事件の全貌を伝えるノンフィクション。</p>	<p>『禎子の千羽鶴』</p> <p>佐々木雅弘／著 学研パブリッシング 2013 中・東・南・河 (916)</p> <p>2歳のとき広島で原爆にあい、10年後に原爆症を発症した少女・佐々木禎子さん。12歳で亡くなるまで、明るくふるまいながら回復を信じて千羽鶴を折り続けた。「原爆の子の像」のモデルとなった禎子さんの実の兄が書いた、禎子さんと家族の物語。</p>
<p>『子どもたちへ、今こそ伝える戦争』</p> <p>長新太／著 和歌山静子／著 那須正幹／著 講談社 2015 全館 (916)</p> <p>一番大事なことは、この本に登場する19人の子どもの本の作家の話は、すべて、つくり話ではないということ。誰もが、子供たちが、戦争の真実を知ること、悲しい過ちを二度と繰り返さない日本になることを願う。</p>	<p>『いしづみ 広島二中一年生全滅の記録』</p> <p>広島テレビ放送／編 ポプラ社 2015 中・東・上・河 (916)</p> <p>昭和20年8月6日原爆で未来を絶たれた広島二中一年生の哀しみの記録。当日清掃作業のため広島市の中心、中島新町の本川土手にいた広島二中の一年生321名と先生4名は、全滅した。子供たちはどのように死んでいったのかが記されている。</p>
<p>『地雷のあしあと ボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたちの叫び』(英文併記)</p> <p>こやま峰子／詩 ボスニア・ヘルツェゴビナの子どもたち／絵 小学館 2003 中・東・南 (936)</p> <p>ボスニアの内戦が終わっても、ボスニアの全土には75万個以上の地雷が残っている。いまだに地雷で傷つく子どもたちがあつと絶えない。ボスニアの子どもたちが描いた絵を中心に作られた絵本。</p>	<p>『ハンナのかばん アウシュビッツからのメッセージ』</p> <p>カレン・レビン／著 石岡史子／訳 ポプラ社 2002 全館 (936) (234)</p> <p>広島県福山市のホロコースト教育資料センターに展示されている、古びた茶色いカバン。カバンの持ち主はアウシュビッツのガス室で13年の生涯を終えた、ユダヤ人のハンナ。半世紀後の日本でハンナのカバンとであったふみ子は、ハンナがどんな少女だったのか、ハンナを探す旅を始める。</p>



発行 平成28年7月
編集・発行 宇都宮市立図書館
問合せ 宇都宮市立中央図書館
〒320-0845 宇都宮市明保野町7-57
電話 028-636-0231